様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年　6 月 18 日現在

機関番号：50104
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：20720087
研究課題名（和文）　人種的視点から見たアーネスト・ヘミングウェイ研究

研究課題名（英文）　A Study of Ernest Hemingway's Works from the perspective of race and racial differences

研究代表者　本荘　忠大（HONJO　TADAHIRO）
旭川工業高等専門学校・一般人文科・准教授
研究者番号：50353222

研究成果の概要（和文）：ヘミングウェイの初期の短編から『キリマンジャロの麓で』に至るまで、人種は主要なテーマであり続けた。そこで人種的視点から WASP の作家であるヘミングウェイの作品を再読することにより、彼の人種意識の解明を試みた。その結果、ヘミングウェイ自身が確固とした人種上のアイデンティティを確立しえず、白人アメリカ人であることとは何かを模索しながらも否定しえない白人としての人種上の優位意識に影響され続けていた点が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Race is central to Hemingway's fiction from his early stories to *Under Kilimanjaro* in the 1950s. The aim of this study is to reread Hemingway's stories from the perspective of race and racial differences and offer a new examination of Hemingway's internalized racial attitude toward ethnic minorities. In conclusion, the results of the present study indicated that Hemingway could never construct a sense of racial identity that could be taken seriously, wavering incessantly between his attempts to understand his white American identity, as defined by racial difference and his own undeniable privileges that he enjoyed at the expense of many of the ethnic minorities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２０年度	６００，０００	１８０，０００	７８０，０００
平成２１年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
平成２２年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
平成２３年度	５００，０００	１５０，０００	６５０，０００
年度			
総　計	２，１００，０００	６３０，０００	２，７３０，０００

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学
キーワード：米文学

１．研究開始当初の背景
アメリカ合衆国の歴史は、WASP の文化を中

心に形成されたものであるが、このようなアメリカ文化の中心的な担い手となってきたWASPの常識は、アメリカ史最大の非常識でもあったことが現在では判明してきている。そこでアメリカにおけるWASP文化形成の歴史的背景を踏まえながら、民族的少数派の視点からWASPの作家によって発表されてきた作品を読み直し、彼らをアメリカ文学史の中で再評価、再定位させることは重要かつ意義のある作業である。しかしこれまでヘミングウェイと人種というテーマで、作品分析と作者の人種意識を包括的に扱ってきた研究は皆無に等しかった。

(1) 1936年に出版された二つの短編「キリマンジャロの雪」および「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」を中心とした作品を巡って、従来は物語の背後に隠された帝国主義文化の歴史的痕跡を浮き彫りにする論が展開されてきた。そしてアフリカ先住民の描かれ方については、被抑圧者として受容を強制する側面が強調されるあまり、さりげなく描かれる彼らの視線や表情などについては、あまり注目されることがなかった。

(2) 1950年代にヘミングウェイが行った二度目のサファリ旅行がその題材になったとされている遺作『キリマンジャロの麓で』は、作品そのものの分析や二度目のサファリについて検証される材料になることが多かった。そしてこの作品を基に、逆にヘミングウェイの最初のサファリ旅行と1930年代に出版された作品を再考する研究はほとんどなかった。

(3) アメリカ独自の法律であった禁酒法成立の背景には、アメリカへ飲酒の習慣を持ち込んできたカトリック教徒の新移民に対抗して、従来の社会体制を維持しようとする旧来のアングロ・サクソン系プロテスタント移民の意図が潜んでいたと言われている。このような禁酒法の底流に潜んでいたWASPの人種意識がヘミングウェイの作品においてどの程度投影されているのかという問題、さらには禁酒を徹底していたオークパークで生まれ育ったヘミングウェイが、なぜ故郷に反抗して自ら酒を楽しみ、また作品に描き込んだのかといった問題については、これまで検証されることがなかった。

(4) 『誰がために鐘は鳴る』、『午後の死』といったスペインを舞台にした作品を巡っては、作者ヘミングウェイとスペイン文化の関わりといった視点から分析されることが多かった。しかし闘牛やフラメンコの分野でスペイン文化に大きく貢献してきた「ジプシー」については、作品分析において間接的に取り上げられる程度のもので、「ジプシー」を中心に分析した批評はほとんどなかった。

２．研究の目的

アメリカにおいては多数派の文化によって否定、歪み、縮小を被ってきた「そこにある」と同時に「そこにない」ものでもある文化を、さらには自らが滞在した各国における先住民と彼ら固有の文化をヘミングウェイはどこまで正確に認識し、作品に描き込んだのか、そしてどの点をWASPとしての民族的少数派に対する差別的な視点から、描いた（描いてしまった）のだろうか。この点を究明するべく、アメリカ文学、文化史に関する資料、および歴史学、文化人類学、民俗学等の研究成果を援用する。そして領域横断的な視点からテクストにおいてうずまくさまざまな権力構造を明らかにし、作品の背後に隠された作者自身の無意識を解明することにより、ヘミングウェイ作品における新歴史主義的なアプローチの可能性を探ることが目的である。

３．研究の方法

作品のみならず、ヘミングウェイ自身が出版社の編集者であるマックスウェル・パーキンズ等に送った書簡、伝記的背景等も考察の対象として取り上げる。また歴史学、文化人類学、民俗学等の関連資料をできる限り幅広く猟渉し、ヘミングウェイ作品が出版された当時の社会的背景を踏まえていく。そして当時の文化的コンテクストの中で、テクストの背景に展開しているWASPの文化のみならず、民族的少数派の文化について検証を行うことにより、ヘミングウェイ自身の人種意識に迫っていく。

４．研究成果

(1)1930年代の東アフリカにおける白人とアフリカ先住民の歴史的変遷を分析した。その結果、白人が行うサファリにおいて白人に奉仕することを教え込まれたアフリカ先住民による非組織的で個人的に行われる抵抗が、圧倒的な暴力に屈する弱者の一戦略として見られていた点が明らかになった。当時の東アフリカにおいては、白人による植民地主義的支配に抵抗する先住民が出現するともに人種が社会的関心事になっていたのである。そこで「支配する側」と「支配される側」という双方を固定化した均質なカテゴリーとして捉えるのではなく、植民地において構成される権力関係を前提としつつも、両者の相互作用に注目することにより、作品分析を行った。その結果、1930年代を背景にアフリカはヘミングウェイが先住民の真実の姿を描こうとする実験場として機能していたと考えられる点が明らかになった。またその一方でアフリカは自らが白人であると確証させ

る実践に創作活動を通して加担しているヘミングウェイ自身の真の姿を描き出す空間ともなっていることを明らかにした。

(2) 1950 年代の東アフリカにおける白人とアフリカ先住民の歴史的変遷を分析した。その結果、白人による植民地主義的支配に対抗するべくマウマウ団をはじめとするアフリカ先住民による組織的な抵抗運動が激しく行われていた時期に相当することが明らかになった。このような歴史的背景を踏まえた上で、『キリマンジャロの麓で』において白人・アフリカ先住民間における人種的境界線を乗り越えようとする主人公の行動とアフリカ先住民の描かれ方が、1930 年代に出版されたアフリカを舞台とする物語とどのように異なっているのかを比較検証した。そして「キリマンジャロの雪」、「フランシス・マカンバーの短い幸福な生涯」さらには『アフリカの緑の丘』が当時のアフリカ先住民の真実の姿をより正確に描こうと試みながらも、一方でヘミングウェイの白人支配者としての人種的優越性が覗いて見える点を明らかにした。ヘミングウェイ作品を東アフリカにおける社会的背景というコンテクストから読み直す試みは、今後のヘミングウェイとアフリカを考える上で重要な視点を提供できたと自負している。

(3) アメリカにおいて施行された禁酒法およびその基盤となった禁酒運動について検証していくと、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてアメリカが大規模な産業社会に移行するとともに、都市を中心に新移民が急激に増加していたことと関連していることがわかった。つまり、このような現象はアングロ・サクソン系プロテスタント移民の間で、新移民によってアメリカが支配されるかもしれないという不安を広めることとなり、自分たちの文化を擁護しようとする排外主義が禁酒運動を推し進める原動力の一つとなっていたのである。一方でアングロ・サクソン系移民を祖先に持ち、プロテスタントの家庭に生まれ育ったヘミングウェイは、第一次世界大戦中にカトリックに惹かれ、二番目の妻となるポーリーンとの結婚に際して、カトリックに改宗してもいる。このような伝記的背景を持つヘミングウェイは作品において禁酒法を批判的に描いているが、この法律に潜んでいたカトリック教徒を始めとする移民を排除しようとする政治的な意図には奇妙なかたちで寄り添っている点を見出すことができた。この点はカトリックに改宗するというヘミングウェイの人種的な出自を変える試みの限界を示すものとして興味深い側面を浮き彫りにできた。

(4) スペイン文化およびスペイン人と「ジプシー」相互間における歴史的背景を分析すると、これまで「ジプシー」の実像とは異なるステレオタイプ的な「ジプシー」像が多くの人々に無批判に受け入れられ、繰り返し再生産されてきたこと。さらには文学がヨーロッパ文化に「ジプシー」を巡る人種差別を織り込む契機となるステレオタイプ的な「ジプシー」像を創り出したものの一つであることが明らかになった。この点は従来あまり注目されてこなかった「ジプシー」を巡る研究に新たな光を投げかけるものである。またこの研究で得られた知見を、ヘミングウェイ作品に取り入れて分析した際、ヘミングウェイ自身が実在の「ジプシー」の真の姿を描き出そうと試みていた一方で、ステレオタイプ的な「ジプシー」像とヘミングウェイが共犯関係にあった側面が作品の随所に見出せることがわかった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Tadahiro Honjo、 “Hemingway and Africa in the 1930s: Portrayals of Africans and Hemingway’s Racial Consciousness.” 『北海道アメリカ文学』、査読有、第 26 号、2010、44-59、

② 本荘忠大、「アフリカ先住民表象に見るヘミングウェイのアフリカ」、『ヘミングウェイ研究』、査読有、第 9 号、2008、29-38、

〔学会発表〕（計２件）

① 本荘忠大、「ヘミングウェイと禁酒法―『日はまた昇る』および「ワイオミングのワイン」に見るヘミングウェイの人種意識」、日本アメリカ文学会北海道支部、2010 年 7 月 31 日、札幌市立大学サテライト・キャンパス、

② 本荘忠大、「ヘミングウェイと 1930 年代のアフリカ―創造されたアフリカ先住民に見るヘミングウェイの人種意識」、日本アメリカ文学会北海道支部、2008 年 11 月 29 日、藤女子大学、

〔図書〕（計３件）

① 本荘忠大, 他、勉誠出版、『ヘミングウェイ大事典』、2012 予定、総ページ数は未定

② 本荘忠大, 他、臨川書店、『アーネスト・ヘミングウェイ―21 世紀から読む作家の

地平』、2011、160-173、

③ 本荘忠大, 他、英宝社、『アメリカ文学における階級—格差社会の本質を問う』、2009、227-243、

６．研究組織

(1)研究代表者

本荘　忠大（HONJO　TADAHIRO）
旭川工業高等専門学校・一般人文科・准教授
研究者番号：50353222

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし